

新潟県十日町市の山合の村に廃校をマルゴト作品にした「絵本と木の実の美術館」がある。木造二階建ての校舎を、ぼくの絵をかざる「美術館」にするというプランは、この村のたたずまい、小さな学校の教室や廊下や壁に出合った時、ここは美術館ではなく「空間絵本」にしようと考えた。流木や木の実を用いて、最後の在學生やオバケを主人公にし、学校をまるごとアート作品にした。

「絵本と木の実」という可愛いげな名前、親子連れがやって来た。だが初日から子どもが「コワイ！入りたくない！」と入り口で何人も泣いていた。だが平日でも1000人もの観客がおしよせてくるとは思ったこともなかった。夕方、また子どもが泣いていた。「帰りたくない！」と泣いて。

こんなことを「奇跡」と云っているのではない。10年前に計画した校庭に小川の流れを造るという計画は「ユンボ」というニックネームの男がやってきて実現！ぼくの描いた制作不可能なエスキースはマルイチという「空間施工管理技師」(Aerial National Engineer)の高度の技術を持つ人々が無償で進めてくれている。1トン近い大木の切り株が15mの空中に浮んでいる。

そういうとんでもない事が次々と起こる「美術館」。一番すごい協力者はこの「鉢」という集落の人々である。

そこで、今回米人詩人アーサー・ビナードとの合作「カラダのなか、キモチのおく」を開催している。

おそろしくて、危険、嫌がられながら生きているマムシの立場になって、巨大作品と絵本を共同制作した。ヒトはマムシを見つけると殺し、自分のまわりから排除してきた。例えとして適当ではないが、難民や在日の人々を差別する思想に似ているように思える。相手の立場に立つという事は、まず相手のことを知る事、マムシのことを知れば知るほど、ぼくは、マムシを尊敬してしまった。

「春の小川」という歌は、高野辰之が渋谷区の街中を当時流れていた川を見て創ったらしい。高野には「ふるさと」「夏は来ぬ」「もみじ」などの作詞がある。高野の歌にあるような「小川」は日本中どこにもない。

だが、今年、美術館にはサラサラと流れている。ぼくの出身地土佐の野中兼山が考案した木工沈床という

河川工法で創った小川だ。この川にはすでにマメゲンゴロウ、ミズカマキリ、何種類ものヤゴなどの水生生物と共に、イモリやサンショウウオなどが棲みついている。いろんな鳥、ケモノも様子を見にやってくる。そしてついに生態系の頂点にいる猛禽類がやってきた。その姿は立派でほれぼれしてしまった。ぼくらは彼を毎日たのもしく見ていたがある日、ぱったり来なくなってしまった。二日後、ぼくはその亡骸を巨大マムシトンネルの裏手で見つけた。首を切断され、身体の半分はなかった。多分、イタチかテンの食料になってしまったにちがいない。これも自然の摂理、仕方ない。

このタカの名前は知らないが(サシバか?)レクイエムのため、みどりの流木で大きなタカを創った。1トン以上の重さになったが、空間施工管理技師のみなさんが空に飛ばしてくれたのである。



カラダのなか、キモチのおく